

2024年12月22日降臨節第4主日説教

ミカ書 5章1-4節

ヘブライ人への手紙 10章5-10節

ルカによる福音書 1章39-45節、《46-55節》

本日は、降臨節第4主日です。ろうそくも4本目となりました。4本目のろうそくの意味は、順番（希望、平和、喜び、愛）からすると「愛」ということになります。3年前の2021年の原稿では、「平和」としていました。その時は、世界が少しずつ平和になると思っていたのかもしれませんが。

本日の福音書は、マリアがエリサベトを訪問するお話です。ルカ福音書は、洗礼者ヨハネを産むエリサベトとイエス様を産むマリアとを、対比するように描いています。しかし、対比だけではなく、共通していることもあります。それは、人間には不思議に思えることであっても、「**神にできないことは何一つない**」（ルカ1:37）という言葉が実現したことです。この言葉自体は、本日の福音書箇所少し前にある、天使ガブリエルの言葉ですが、エリサベトとマリアの出産は、その言葉が、具体的に現れた出来事に他ならないのです。

人間の理性的判断では不思議・不可能に思えること、そのようなことを率直に受け入れることは、なかなか困難です。このお話のマリアもそうです。マリアは、「**私は主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように**」（ルカ1:38）と答えていたのですが、そうではありませんでした。この後、エリサベトのもとへ行って、本当にエリサベトにも不思議なことが起きているのか確かめに行くのです。それが本日の個所です。

その確認作業を、「**その頃、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った**」（ルカ1:39）と物語は淡々と告げます。福音書を書いた人が、イスラエルの地理をどれほど知っていたかわかりませんが、洗礼者ヨハネが誕生したであろうという場所は、エルサレム西郊外のエン・カレムにあります。ナザレから行きますと、直線距離で約100キロです。ベツレヘム（直線距離で約110キロ）よりは近いですが、かなりの距離です。季節は書いてありませんが、歩いていくのですから結構大変です。

マリアが訪れたとき、エリサベトは、洗礼者ヨハネの受胎を告げられて、六ヶ月経過していました。おそらくマリアは、エリサベトを見ただけで、天使ガブリエルが告げたことが本当であると確認できたのかもしれませんが。しかし、そのような確認の描写はありません。ただ、「**そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶をした**」（ルカ1:40）とだけ語られます。しかし、「**マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子が躍った。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子様も祝福されています』**」（ルカ1:41）とエリサベツの反応と、言葉が告げられます。そしてそこに大切な事柄があります。まず、マリアの確認が、人間的な確認——受胎後6カ月という客観的な確認——を超えて、「**聖霊**」による出来事であることを告げます。そして、その聖霊が、エリサベトの体内の子を躍らせ、エリサベトにも気づきを与えるからです。人間にはできないが、神にはできること、その不思議なことを理解するとは、単に人間が理性を駆使して理解するのでもなく、

「聖霊」に満たされて確信する事柄に他ならないと、二人のお話は告げるのです。

エリサベツは、言葉を続けます。「私の主のお母様が、私のところに来てくださるとは、何ということでしょう。あなたの挨拶のお声を私が耳にしたとき、胎内の子が喜び躍りました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう」(ルカ 1: 43-45)。「信じた方」は、マリアのことを直接的には指していると思いますが、この言葉には、不思議な出来事を先に体験したエリサベツ自身も含まれていると思います。エリサベツも、マリアの訪問によって、確信に至ったのです。

今日、クリスマスを前にしてこの物語から学びたいことは、本日の聖書日課ではありませんが、その少し前にある、天使ガブリエルが語った言葉、「神に出来ないことは何一つない」(ルカ 1: 37) という事柄と、その事柄を信じ続けることです。そして信じ続けるために教会がいかに大切であるかということです。

「神に出来ないことは何一つない」という事柄は、言い換えれば、主なる神様が全知全能であるということです。わたしたちは、ニケア信条で「全能の父」という表現を用います。また、様々な祈りの中で全知全能の神様という表現を用いることもあります。しかし、実際には、全知全能といっても、なかなか信じることはできないと思います。また、マリアとエリサベツの場合は、受胎を告げられるまでの経緯はそれぞれ異なりますが、理性ではあり得ない受胎という出来事が先でした。そして、それゆえに人間の常識を超えた受胎に、二人は半信半疑でした。しかし、マリアのエリサベツ訪問によって、二人はそれが人間にはできないことでも、聖霊によっては可能なことであったことに気が付き、確信を得ます。まさにこれが信仰の確信、信仰の恵みに他ならないのです。

純粹であったであろうマリアでも、あるいは長い信仰を持っていたエリサベツでも、すぐにそのような信仰的革新には至りませんでした。人間は、理性があるがゆえに、疑いを持ってしまうからです。そして、その疑いから派生する人間の理性の範囲内の判断は、できないことではなく、できることのみを重要視してしまうのです。しかし、そのような判断を超えさせる存在、信仰的確信に至らせる存在が、自分以外のもう一人の他者なる存在です。それは簡単に言えば、信仰の友です。そのような他者成る存在が交わる場所が教会です。わたしたちは教会の礼拝と、挨拶のような小さな交わり、それを通してでも、信仰的革新に至ることができるのです。そして、この世界で不可能と思っても、実現可能な事柄があることを信じられるのです。

クリスマスは、イエス様の誕生を祝う時ですが、その誕生が「聖霊」によるものであることを様々な形で告げます。それは、その誕生自体が奇跡であることを告げています。それゆえ、その誕生を祝うということは、その誕生を祝う者が、愛をもって、誰かと交わりを続ける時、そして、何かを愛をもって何かを願う時、その願いは、人間的には困難であっても、実現することを示しています。簡単に言えば、人間の思いを超えた奇跡が起こることを示しています。今、世界は、数多くの争いと悲しみの中にあります。もし、世界中の人が、まことの平和を願い始めるならば、世界は変わると思います。まさに奇跡かもしれませんが、まことの平和が実現すると思います。教会は『聖書』のお話を通して、その平和の実現について語り続けたいと思います。ことに今は、イエス様の誕生を通して、語り続けたいと思います。